

紹介

林屋辰三郎編
上田正昭編

篠村史

旧京都府南桑田郡篠村、現亀岡市篠町といえ、山陰道を丹波へ越えてすぐ、歴史と伝説に名高い大江山・老の坂のふもとであり、足利高氏旗上げの地篠村八幡の所在地であり、新しくは京都府下でも最も激しく小作争議が戦われて歴史上すこぶる興味をそそられるところである。この村史は、しかしそうした内容よりも前に、編纂の方針が極めてユニークである。近時市区町村史の編纂は、ブーム的に盛行しつつあるが、町村合併を記念しての、いわば共通の歴史を持つとする意図に出るものが多い。『篠村史』の編纂も同じく合併問題が契機となりながら、しかしこれとは全く逆に「新しい亀岡市篠町への門出のために、旧村の足跡を正確に記録・保存」することを目的とし、しかも「決して篠村への決別という感傷的気分支配されず」「厳密な科学的態度をもつて」「何の虚飾なしに村

の全貌を示すことにつとめ」(六頁)ている。もとより旧篠村は歴史を通じて一つの自治体であつたわけではないにしても、明治以来の一世紀の歴史は、「篠村」を単位として展開してきたのであり、この歴史を無視しては篠村の現在はいり得ない。とくに篠村の合併は、亀岡市へのいわば吸収合併であつてみれば、篠村にあつた旧篠村の人々の心の糧としてその歴史を総括しておくことは、まことに当を得た処置であつたといわなければならぬ。

立命館大学教授林屋辰三郎氏、同講師上田正昭氏を編者に、同衣笠安喜助手はじめ大学院学生多数によつて執筆された本文は、こうした本書の性格に最もふさわしい内容をもっている。日本歴史の流れの中に、篠村の断片史料をあてはめるよりはむしろ、篠村の史料に即しての構成がとられている。従つて古代中世は、歴史学上幾多の興味を抱かせながらも比較的分量をおさえられ、代つて明治以降の歴史が、質量ともに豊富である。市町村史が、まま明治以前でうち切られるのには、もとより種々の事情が存するではあろうが、その地の人々の心の支えとしての意味は半減す

る。篠村史は、明治以降、資本主義の矛盾と闘う村人の姿を前面に押し出し、さらに合併の経緯をも歴史の一章として含んでいる。

とはいえ古い時代が簡略化されている訳ではなく、史料の存する限り、幾多の新知見に基づいて叙述されている。例えば中世篠村荘に関する記述、近世村落の発達、保津川水運の問題等々、多くの研究者にとつて垂涎の問題を展開している。

以上『篠村史』は、近時の市町村史編纂のブームの中で、ユニークな存在として撫摩な紹介をしたのであるが、ただ惜しむらくは「史料集」の刊行がないことである。本書編纂の由来からしても、「史料集」を編纂してはじめて首尾完結するといえるし、本文の内容が歴史学上有意義であればあるだけ、その史料をも併せて学界に公開されることが、待望されるのである。関係各位の御一考をわずらわしいと思う。(A5判五〇七頁 亀岡市役所篠支所内 篠村史編纂委員会発行 頒価一、〇〇〇円)

(熱田 公)